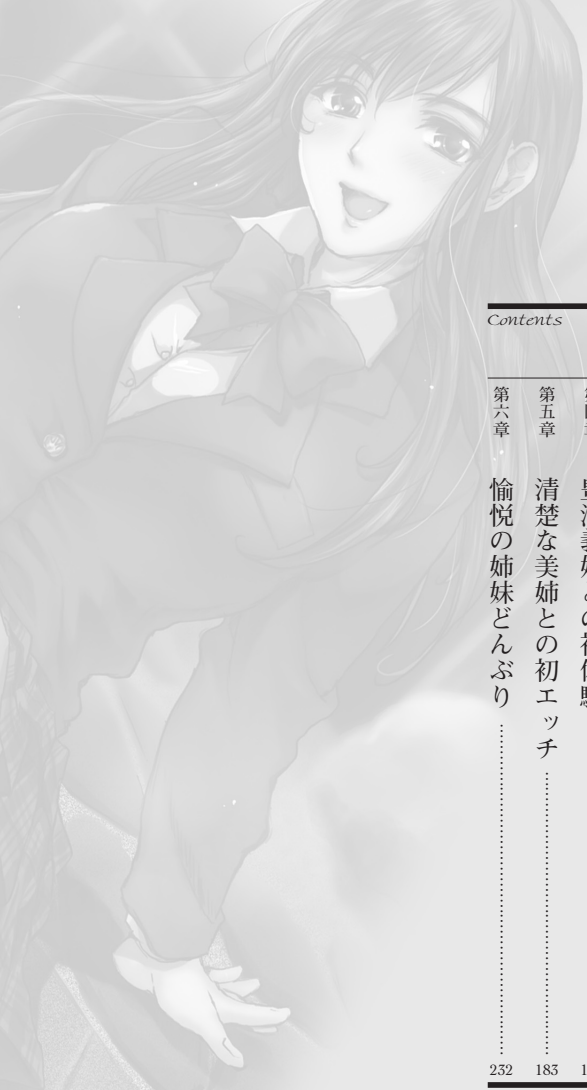
幼馴染みの美姉妹と誘惑温泉郷

早瀬真人
挿絵／貂

立ち読み版

KTC
KYU TEKE COMMUNICATION



Contents

目次

第一章　お姉さんの包茎矯正……4
第二章　美少女の濡れた秘芯……53
第三章　悦楽の童貞嬲り……94
第四章　豊満義姉との初体験……138
第五章　清楚な美姉との初エッチ……183
第六章　愉悦の姉妹どんぶり……232

登場人物 *Characters*

藤木 拓馬
(ふじき たくま)

優柔不断ながら性的好奇心は旺盛な高校[redacted]年の童貞少年。実家は温泉旅館を経営している。中学から始めたテニスは、インターハイに出場するほどの腕前。

辻村 愛子
(つじむら あいこ)

拓馬の幼馴染みの十[redacted]歳。快活で明るいが気が強く強情っぱりな性格。誕生日が一ヶ月違いで学年は一つ上の拓馬を舎弟扱いする。ロングヘアの映える美少女。

辻村 美咲
(つじむら みさき)

愛子の姉であり拓馬の初恋の相手。清楚で淑やかな癒やし系の美人。だがお酒が入ると乱れる悪癖もある。二十歳の身で、他界した母親の喫茶店を引き継いでいる。

藤木 由香里
(ふじき ゆかり)

拓馬の兄嫁で、温泉旅館の若女将。しっとりとした大人の雰囲気を纏う女性。厚手の着物を着ていても隠しきれないムッチリとしたグラマラスボディを持つ。

第二章　美少女の濡れた秘芯

1

美咲と愛子を自宅に送り届けた拓馬は、実家に戻り、自室のベッドに仰向けになった。

明日は、午後から朋徳女子学園テニス部に顔を出す予定である。

拓馬の住む地域では唯一の女子校であり、中学の頃から男子たちのあいだでは、きれいなお姉さんたちが多いと、事あるごとに噂になっていた学校だった。

もちろん、女子校に足を踏み入れる経験は初めてのことである。

紺色のブレザーにリボンタイ、丈の短いグレーのプリーツスカートに白いソックス。

いかにもお嬢様といった雰囲気の女子ばかりで、拓馬も地元にいたときは羨望の眼差しを何度も送ったものだ。

乙女の花園に潜入と考えただけで、胸のあたりが甘く疼いてくる。

（まあ、愛子がいるんじゃ、でれでれした姿は見せられないだろうけど。それにして

も……あいつめ、いいところで邪魔しおって）

拓馬は天井をボーッと見あげながら、美咲から受けた手コキに包茎矯正、そしてお掃除フェラを思いだした。

愛子が現れなければ、もしかすると童貞を捧げていたかもしれない。

美咲の別人のようなセクシーさも衝撃的だったが、手コキだけでもあれほどの快感を得たのである。

セックスなら、どれほどの悦楽を与えてくれるのだろう。

ズボンの中のペニスがむっくりと体積を増し、顔が火照ってくる。

美咲の美貌を思い浮かべた直後、今度は愛子の小悪魔的な微笑が脳裏に甦った。

（美咲姉ちゃんは相変わらずきれいだったけど、愛子も……かわいくなってたよな。女の子って、しばらく見ないあいだにあんなに変わるものなのかな？）

顔立ちはもちろんのこと、丸みを帯びた身体つきを、まともに目にすることができなかった。

何にしても、明日の美咲とのデート、女子高でのテニスコーチと、今年の冬休みは充実した日々を送れそうだ。

「あーあ、ちょっと疲れたかな」

電車で長時間揺られての帰郷、美咲や愛子との再会、そして喫茶店での大量射精と、初日からびっくりすることが多すぎた。

大きなあくびをした拓馬は、いつの間にか深い眠りの中に落ちていった。

どれぐらい時間が経過したのか、拓馬は蛍光灯の光の眩しさにふっと目覚めた。

(あ、いけない。うたたねしちゃったのか)

壁時計を見あげると、すでに針は午前零時を回っている。

「もう一度、風呂に入ろうかな」

露天風呂への一般客の入浴時間は、午前六時から午後十時までだったが、従業員に限っては時間外でも入れることになっていた。

夜空に輝く満天の星を眺めながらの入浴は、十代の少年でも、心が洗われるような気分を味わえる。テニスで一年間酷使してきた身体をオーバーホールするにも、まさにうってつけの環境だ。

上半身を起こし、伸びをした拓馬は、すぐさま下腹部の違和感に気づいた。

股間の逸物はジーンズの下で完全屹立し、ズキズキと脈打っている。

朝勃ちならぬ深夜勃ちだろうか、拓馬は苦笑しながらベッドから下り立った。

（あんなにたくさん出したのに……。考えてみたら、美咲姉ちゃんとの二度目はなかったんだもんな）

悶々とした下半身の疼きに、自然と射精願望が込みあげてくる。

一瞬股間に手を伸ばした拓馬は、明日の美咲とのデートを考えて自制した。

昨日の今日なら、初体験も決して夢物語とは言えない。

もっとも、アルコールが入ると記憶がなくなるという愛子の話を信じれば、単なるデートだけで終わる可能性もあったが……。

（ここで出しちゃったら、やっぱり……もったいないよな）

我慢したほうが無難だと判断した拓馬は、チェストからバスタオルと替えの下着を取りだし、自室の扉をそっと開けた。

家族たちは旅館の一番端の一画に居住しており、露天風呂に入るためにはいったん客室側に出なければならない。

拓馬は静まり返った廊下を音を立てずに歩き、従業員出口に向かった。

（明日はどこに行こう。狭いこの町じゃ、デートの場所といっても、展望台か神社や公園ぐらいしかないものな。気の利いた店もないし、やっぱりとなり町の繁華街まで足を伸ばしたほうがいいかも）

あれこれとデートの計画を立てながら歩を進めていると、兄夫婦の部屋から小さな物音が聞こえてくる。

（あれ……義姉さん、まだ起きてるのかな。兄さんは飲み会で、今日は友だちの家に泊まってくるって言ってたけど……）

夕方に由香里が見せた寂しそうな微笑を思いだした拓馬は、次の瞬間、ハッとしながら足を止めた。

襖の隙間から室内の明かりが洩れ、噎び泣くような声が耳朶を打つ。

（ね、義姉さん……泣いているのか？）

やはり、何かつらい悩み事を抱えているのだろうか。

心配げな表情で部屋に近づいた拓馬は、微かに開かれた襖のあいだから覗き見えた光景に驚愕の悲鳴をあげそうになった。

畳の上に敷かれた布団の上に、薄い桃色の浴衣を着た由香里が仰向けに寝そべっている。はだけた襟元からたわわな乳房が半分ほど露出し、捲れあがった裾からはむっちりとした太腿が剥きだしになっていたが、拓馬の目を射貫いたのは豊満な身体つきだけではなかった。

「あ……ンうううううっ」

尾を引く兄嫁の切なげな吐息に混じり、低いモーター音が唸っている。しかも由香里の白い両手は股間に潜りこみ、真っ赤な棒のようなものが浴衣の布地の下で出し入れされていたのだ。

（ま、まさか……!?）

呆気に取られた拓馬は、ただぽかんと口を開け放つばかりだった。

フロアライトのほのかなオレンジ色の照明が、幻想的かつ淫靡な雰囲気を醸しだしている。生白い肌に浮きたつ、白と黒のコントラストが悩ましい。

由香里は優美なヒップをツンツンと浮かせ、時おり腰を回転させては手の動きを速めていった。

（あ、あれって……バイブ？）

浴衣の裾に隠れてはっきりとは見えなかったが、男性器をかたどった形状は電動バイブレーターとしか思えない。

美しき兄嫁が、深夜に大人のおもちゃで自慰行為に耽っていようとは。

拓馬は瞬きもせずに、美熟女が繰り広げる手慰みを凝視していた。

半勃ち状態だったペニスが下着の中で鎌首をもたげ、狂おしいほどの情欲が突きあがってくる。

由香里は眉間に無数の縦皺を刻み、肌にはうっすらと汗の皮膜をまとわせていた。
「ふ、うぅン……いやぁぁっ」
十[illegible]歳の少年にも、彼女が絶頂への階段を着実に昇っているのがわかる。
それでも拓馬は、まだ幻覚を見ているのではないかと思った。
由香里は既婚者であり、兄というれっきとした夫がいる身なのである。
夫婦の関係が冷めているという印象は受けなかったが、やはり家を離れているあいだに何かあったのかもしれない。
そうでなければ、夫の帰りが待てないほど欲していたのだろうか。
二十七歳という女盛りの欲求をまざまざと見せつけられた拓馬は、無意識のうちに右手を股間の膨らみに押しあてていた。
剛直と化したペニスはビンビンに反り勃ち、股間の中心部を小高く盛りあがらせている。
(あぁ、やばい。我慢できなくなってきちゃった)
明日は美咲とのデートがあるだけに、ここで無駄撃ちはしたくなかったが、拓馬の下腹部も凄まじい性欲に翻弄されていた。
(あ……あ、すごい!)

ヴイーンという電動音とともに、バイブがビデオの早回しのようにスライドされる。
由香里のヒップがグッとせり上がり、上体をブリッジ状に反らせると、浴衣の布地がさらに捲れあがった。
(あ、おマ○コが見えそう!)
上品な兄嫁は足をM字形に開き、バイブが抜き差しされている箇所を露にさせる。
手暗がりで女陰の形まではよくわからなかったが、ふるふると揺れる内股の熟脂肪ははっきりと見て取れる。
汗で濡れるもっちりとした柔肌の、何と生々しいことか。
(あぁ、手が邪魔になってよく見えない。おマ○コって、いったいどんなふうになってるんだよ)
拓馬は股間の逸物を右手でギュッと握りこみながら、顔をさらに襖の隙間に寄せていった。
「あ、あ……イクっ、イキそう」
か細い声の合間に、股ぐらの奥からニチュニチュと淫らな水音が響いてくる。
深紅のディルドウにへばりつく愛液のてかりを確認したとたん、拓馬の射精感もついにリミッターを振りきった。

「あ、はぁぁンっ、イクぅっ……イクっ！」
由香里は絶頂を迎えたようで、両足をピクピクと痙攣させたあと、布団の上に身体を沈め、同時に股間からバイブがぽろりと抜け落ちる。
溶け崩れた女の秘園が晒されると、拓馬はこれ以上ないというほど目を見開いた。
淡紅色の恥丘の中心に、唇のような二枚の陰唇が誇らしげに突きでている。
熟れてぱっくりと開いた様は、まるで割れたザクロのようだ。
肉割れのあわいから微かに覗き見える、ゼリー状の媚肉が膣内粘膜だろうか。
少年がぎらついた目で女芯を注視していた時間は、ほんの五秒程度だったのかもしれない。それでも牡の欲望は内から逆巻くように吹き荒れ、拓馬は慌ててペニスの根元を力いっぱい握りこんだ。
（こ、堪えろ！）
さらに女肉の構造を瞼の裏に焼きつけようと身を乗りだした瞬間、額が襖に当たり、ガツンと大きな音が響き渡る。
由香里は肩をピクリと震わせ、気怠そうに枕から頭を起こした。
しっとりと潤んだ瞳が向けられ、ほんの一瞬、拓馬の視線と絡み合う。
（や、やばいっ！）

覗き見していたとは思われたくない。
気まずさはもちろんのこと、義理の弟にはしたない姿を見られたのでは、由香里にしてもいたたまれないだろう。
額から脂汗を滴らせた拓馬は、逃げるように兄夫婦の部屋から立ち去った。

2

その日の午後、拓馬は駅の反対側にある朋徳女子学園に向かっていた。
今日はクリスマスイブということで、若女将の由香里をはじめ、家族や従業員たちは朝からバタバタしていた。
団体客の来訪はないようだが、やはりカップル客が多く、朝には全室が予約で埋まったらしい。
周りが忙しくしていると、何となく落ち着かないし、自分も手伝わなきゃいけないのではという気持ちに駆られる。
自室で遅い朝食を済ませた拓馬は早々と家をあとにし、駅前のファーストフード店で時間をつぶしたあと、朋徳女子学園に足を向けたのである。

（義姉さんと顔を合わせるのは、やっぱり気まずいもんな）
兄は朝方に帰ってきたようで、もちろん妻が自慰行為に耽っていたことは知る由もない。
拓馬は駅前の商店街を歩きながら、昨夜の由香里の妖艶な姿を思いだしていた。
生まれて初めて目にした女性のオナニーシーンは衝撃的で、何とも生々しい淫靡さを放っていた。
あれが大人の色香というものだろうか。
（自分が兄さんの立場なら、毎日義姉さんに襲いかかっちゃうだろうな）
酒が入っていた美咲も色っぽかったが、成熟度という点ではやはり敵わない。
数年経てば、彼女もフェロモンをむんむんに発した女性になるのだろうか。
（何にしても、今日のデートは絶対に成功させないと）
美咲が昨日の喫茶店内の出来事を覚えていようがいまいが、拓馬はストレートに自分の気持ちをぶつけるつもりだった。
冬休みの期間は決して長くはないし、来年の七日には再び地元を離れなければならない。
美咲が口にした「私、寂しいの」という言葉は、おそらく本音だろう。

（悠長にかまえている暇はないし、この休みのあいだに美咲姉ちゃんの心をがっちりと掴んでおかなきゃ）

緊張感とともに、身体の内側からエネルギーが溢れでてくるようだ。

拓馬のやる気が、昨夜の美咲との淫靡な体験から来ていることを、彼自身はまったく気づいていなかった。

小さな商店街を抜けると、田園地帯の真ん中に佇む白銀の建物が目につく。

駅からはやや距離があり、歩きだと多少不便さは感じるが、勉強やスポーツをするには抜群の環境だった。

（女子高に入るのなんて、初めてだもんな。乙女の花園か……あぁ、緊張する。あ、愛子だ）

正門前で、白いジャージ姿の愛子が待ち受けている。

「拓馬、遅いっ！」

「え？　時間どおりだと思うけど」

「私を待たせるなんて百年早いわ。私が来る前に来てて当たり前でしょ！」

慌てて駆け寄った拓馬は、一瞬にして苦虫を噛みつぶしたような顔になった。

人にテニスのコーチを頼んでおきながら、なんという言いぐさなのか。

しかも彼女からは、まだお礼の言葉さえ受けていないのだ。
頬をぷぅと膨らませる拓馬を尻目に、愛子は正門脇の守衛所に歩を進め、守衛らしき中年男性とふたことみこと会話を交わす。そして踵を返し、明るい笑顔を振りまきながら戻ってきた。
「これで明後日からの三日間は、顔パスで入れるから。私のあとについてきて」
制服姿のおじさんが、笑顔で会釈をしてくる。
拓馬も軽く頭を下げ、前を歩く愛子のあとに続いた。
冬休みということもあり、校内に女生徒の姿は見えない。
(私立とはいえ、ずいぶんときれいな校舎だな。あたりを見渡しても、ゴミひとつ落ちてないぞ)
清掃が行き届いているのか、女子校らしく、清潔感に満ち溢れた学園だ。
本校舎を通り抜けると、大きなグラウンドが広がり、陸上部と思われる女子部員たちがランニングをしていた。
突然現れた男子にびっくりしたのか、彼女たちはいっせいに好奇の眼差しを注いでくる。
いざ女の集団の中に放りこまれると、男というものは案外だらしのないものだ。

グラウンドを迂回しながら、拓馬は終始恥ずかしそうに俯くばかりだった。
「真正面にある建物が記念館。一階は講堂で、二階から上はクラブの部室が入ってるわ。男子更衣室は三階にあるから、着替えはあそこでして」
「え？　今日は、顔合わせだけでしょ？」
「コーチをするときのことを言ってるの」
「あ、そうか」
「まったく、とろいんだから」
憎まれ口をたたかれ、ブスッとした顔つきをした拓馬の耳に、テニスボールを打つ軽やかな音が聞こえてきた。
葉の散った大ケヤキの向こう、金網に囲まれたテニスコートで、女子部員たちがスマッシュの練習をしている。
部員は十五人ほどいるだろうか。
コートは一面しかなかったが、彼女たちは皆一様に溌剌とした動きを見せていた。
ほんの二、三日前まで練習づけの毎日を送っていたのに、もうラケットを持ちたくてムズムズしている。
自分は心の底からテニスが好きなんだと、拓馬は今さらながら実感していた。

（男の人が一人いる。あの人がテニス部の顧問かな？）
金網の扉を開けた愛子に気づいた男性が、ホイッスルを高々と鳴らし、女子部員たちの動きがピタリと止まる。
「みんな、集合！」
男性が呼びかけたあと、彼女たちは白いスコートを翻し、拓馬の前に集まってきた。
ふだんは女っ気のない生活を送っているだけに、これだけたくさんの女の子に囲まれると、やはり気後れしてしまう。
「君が藤木君かい？」
「は、はい、そうです」
「僕は顧問の水沢（みずさわ）です。今回はうちのテニス部の臨時コーチをしてくれるということで、本当にありがとう。僕はテニスはまったく素人なんで、ぜひよろしく頼みます」
水沢と名乗った男は、三十路を迎えたあたりだろうか。
精悍な顔立ちは一見クールそうだったが、飾らない対応が爽やかで、屈託なく笑う姿に拓馬は好感を抱いた。
「今回の冬期練習は自由参加だったんだけど、君が来るというんで、部員はなんと全員参加なんです。びしびし指導してもらってかまわないから」

「こちらこそ、よろしくお願いします」
続いて三年の部長、女子部員たちが一人ずつ紹介される。
インターハイ出場のニュースが、地元の新聞で大きく取りあげられたことが影響しているのだろう。
彼女たちは皆人懐っこい笑みを湛えており、中には羨望に近い眼差しを向けてくる者までいて、拓馬はかえって萎縮するばかりだった。
部員たちの紹介がひととおり終わると、水沢が白い歯を見せる。
「今日は見学ということでいいのかな？　もしよかったら、このまま指導してもらってもかまわないんだけど」
「そうですね。今日は着替えを持ってきてないんで、みなさんの練習を見学させてもらったらと思います」
本来ならここで愛子の合いの手が入るのだが、先輩たちに遠慮しているのか、やけにおとなしい。
（確か、部長と愛子とのあいだで、俺にコーチを依頼したいという話が出たと言ってたけど……）
自分との関係を、愛子は他の部員たちにどう話していたのか、何となく気になる。

「じゃ、ベンチのほうで練習を見てもらえるかな？　ほら、みんなちゃんと挨拶して」
大勢の女の子たちから頭を下げられ、少なからずモテ気分を味わった拓馬は、鼻の下をデレッと伸ばした。
ふだんは男ばかりのむさ苦しい環境で過ごしているだけに、乙女の花園はまさに天国にいるようだった。
「よしっ！　練習再開だ」
水沢の合図で、部員たちがコート内に散っていく。
目の前に誰もいなくなると、真横に佇んでいた愛子が腕をツンとつついた。
「顔がにやついてるわよ」
「え？　そ、そんなことないでしょ」
「ふんっ、いやらしい」
急に不機嫌になった少女は、一人ですたすたとベンチに歩いていき、あとに続いた拓馬はただ苦笑するばかりだった。
女心と秋の空という言葉は、彼女のためにあるのではないだろうか。
笑っていたかと思ったら、突然怒りだしたりと、態度がコロコロと変わるのは子供のときから同じだ。

（外見がちょっと大人っぽくなっても、中身はやっぱり子供なんだよな）

愛子は妹としてしか見られないし、拓馬の理想の相手はやはり美咲以外に考えられなかった。

お姉さんとのデートに思いを馳せながらベンチに腰かけると、愛子が真横でジャージを脱ぎだし、意識せずとも目が彼女の肢体を追ってしまう。

テニスウェアはやや生地が薄く、ふっくらとした胸の膨らみは、昨夜喫茶店で目にしたときよりも際立っていた。

決して大きいというわけではなかったが、確実に成長していることははっきりと認識できる。続いて愛子が下のジャージを引き下ろし、スコートから伸びたすらりとした脚線美が視界に入った。

シミの一点もないクリームのようになめらかな肌、そしていかにも弾力感のありそうなピチピチとした太腿が、少女特有の瑞々しさを如実に表している。

小高い乳丘、括れたウエスト、丸みを帯びはじめた腰つき。少女と大人の魅力を同居させた、どこか危うそうな雰囲気が、愛子のチャームポイントなのかもしれない。

女子部員の中では、やはり彼女がずば抜けてかわいいだろうか。

真正面を向きながらもドギマギする拓馬は、愛子に小声で話しかけられ、ようやく

我に返った。
「練習が終わったあと、買い物につきあって」
「え？」
「新しいラケットを買いたいの。となり町に行くから、いっしょに選んで」
練習が終わる時間は、午後四時と聞いている。
それからとなり町まで行ったら、美咲とのデートにはとうてい間に合わない。
「い、いや……あの……ちょっと」
拓馬の返答も聞かず、愛子はラケットを手にし、テニスコートへ走っていった。
（じょ、冗談だろ。となり町には、美咲姉ちゃんと行く予定だったのに。こっちの意見も聞かずに強引に決めるところも、昔からちっとも変わっていないじゃないか）
いつもは拒絶できずに彼女の言いなりになっていたが、今日ばかりはそういうわけにはいかない。
（はっきり断らないと）
拓馬が決意を秘めた瞬間、ジャンパーのポケットに入れていた携帯が着信音を鳴り響かせた。
タイミングよく、美咲からの電話だ。

「はい、もしもし」
『あ、拓ちゃん？　今、大丈夫？』
「うん、全然大丈夫だよ」
涼やかな声を聞いているだけで、晴れやかな気持ちになる。
『昨日はごめんね。愛子から聞いたわ、うちまで連れていってくれたんですって？』
「……うん」
果たして美咲は、昨夜のことを覚えているのだろうか。
拓馬が身構えると、彼女はいかにも困惑げといった口調で言葉を続けた。
『私……拓ちゃんに変なことしなかった？』
「え？」
『途中から……全然覚えてなくて』
愛子の言ったとおり、やはり美咲はアルコールが入ると記憶が飛ぶようだ。
正直がっかりといった感はなきにしもあらずだが、事実をありのまま告げるわけにはいかなかった。
電話口での不安そうな声を聞く限り、昨夜の出来事を知れば、彼女は大きなショックを受けるだろうし、下手をしたらデートを中止すると言いだしかねない。

そう考えた拓馬は、当たり障りのない答えを返した。
「変なことなんてしてないよ。喫茶店でちょっと話したあと、美咲姉ちゃん、すぐに寝ちゃったんだから」
『そ、そう。……よかった』
ホッと安堵の溜息が、電話越しに聞こえてくるようだ。
たとえ昨夜のことを覚えていなくても、美咲を好きだという気持ちに嘘偽りはない。
(最初の予定どおり、ストレートに告白するべきだよな)
さらに闘志を燃やした拓馬だったが、お姉さんが次に放った言葉は信じがたいものだった。
『それとね……ごめん。突然急用ができちゃって、今日のデートは無理そうなの』
「え?」
『本当にごめんっ!』
「よ、夜とかもだめなの?」
『ごめんねっ! この埋め合わせは絶対にするから』
「あ、あの……あっ」
デートキャンセルの理由を問いただす前に、電話は切れてしまった。

生真面目な性格の美咲が約束を反故するぐらいなのだから、よほど大切な用事ができたのだろう。
本来なら仕方がないとあきらめるところなのだが、今日はクリスマスイブだけに、得体の知れない不安が脳裏を占めていく。
（ま、まさか……急用って、他の男とのデートじゃ）
拓馬は携帯を握りしめたまま、失意の表情を浮かべるばかりだった。

3

となり町からK温泉町に戻ってきた拓馬と愛子は、肩を並べて自宅への道を歩いていた。
新しいラケットを購入した愛子は、よほどうれしかったのか、ルンルン気分で足取りも弾むようだ。対照的に、拓馬の顔色はどうにも冴えなかった。
本来なら今頃美咲とデートをしているはずが、まさか愛子の買い物につき合わされようとは。
しかも駅前に駐輪しておいた彼女の自転車を、拓馬が手押ししているのだから、こ

れでは召使いと何ら変わりがなかった。
「ねえ、鳥栖川神社に寄っていこうよ」
「え？」
「鳥栖川神社で、ちょっと休んでいこうって言ってるの」
「い、今から？」
時刻は午後六時を過ぎ、日はとっぷりと暮れている。
寒風吹きすさぶなか、寂れた神社で何をしようというのか。
「喉が渇いたから、コーヒーでも買ってきて」
愛子は道ばたに設置された自動販売機を指差し、脇目も振らずにすたすたと神社の方角に歩いていく。
「はいはい」
小さな溜息を吐いた拓馬は、いったん自転車を停め、販売機で缶コーヒーを二本買ってから愛子のあとを追った。
一度言いだしたら聞かない性格だということは、先刻承知している。
口答えなどしようものなら、眉を吊りあげて怒りだすに違いない。
それでもこの日に限って、拓馬は心の中で割りきれない感情を芽ばえさせていた。

美咲からデートをキャンセルされたショックが、いまだに尾を引いているのだろう。
失意の気持ちが徐々に憤懣やるかたない思いに変わり、愛子の身勝手な振る舞いを見るにつけ、刺々しい感情となって噴きだしてくる。
神社の境内に人影はなく、雑木林がざわざわと不気味な音を立てていた。
(こんなところで休憩って、いったいどういうつもりだよ)
本堂の木造の階段部分に腰かけた愛子は、ラケットカバーを外し、ご満悦の表情でラケットを眺めている。
拓馬は缶コーヒーを脇に置き、彼女のとなりに腰を下ろした。
「このラケット、前から欲しかったんだ」
「そう、よかったね」
愛子は高校に進学してからテニスを始めたが、拓馬の影響もあるのかもしれない。
目をきらめかせる姿を見ていると、テニスが心の底から好きなようだ。
「拓馬、コーヒー」
「え？　あ、ああ」
缶を一本手に取り、手渡そうとすると、愛子は軽く睨みつけてくる。
「開けて」

「え？」
「今はラケットを見てて両手が塞がってるんだから、気を利かせて開けてよ」
ムスッとしながらプルトップを開けたところで、拓馬はつい皮肉めいた言葉を投げかけた。
「言っておくけど、テニスってのは道具でするものじゃないからね」
「はあ？」
「腕でするもんだってこと」
「でも道具だって大事でしょ？　素手ではできないんだから」
ああ言えばこう言うといった態度に、いつになく頭が熱くなってくる。
拓馬は真面目な顔つきで、悪びれもしない少女をたしなめた。
「前から言おうと思ってたんだけど、呼び捨てというのはないんじゃない？　仮にも俺は先輩なんだし、短期間とはいえ、愛子の所属しているテニス部のコーチでもあるんだから」
「誕生日なんて、一ヶ月しか変わらないじゃん。それに拓馬は、もともと私の舎弟でしょ？」
「しゃ、舎弟って、そんな……」

「ただでさえ、あんたは引っ込み思案なんだからさ。昔から私がリードしてあげてたこと、忘れたの？」
リードされていたというより、わがままにつき合わされていたと言ったほうが正しいのだが、どうやら彼女はそのことで恩を着せているようだ。
異議ありとばかり、拓馬が反論しようとすると、今度は愛子が強烈な嫌味を放った。
「拓馬は私の言うことだけ聞いてればいいの！　口答えするなんて生意気だよ、彼女の一人もできないくせに」
一瞬全身の血を逆流させたものの、拓馬はすぐさま口角をすっと上げた。
「ふうん。じゃ、そう言う愛子には恋愛経験があるんだ？」
「そ、そりゃ……あるわよ」
「キスの経験は？」
「もちろん、当然でしょ」
「いつ？」
「中学二年のとき……だったかな」
「誰と？」
「う、うるさいわね、そんなことまで話す必要はないわ」

うろたえる愛子を見た限り、どうやら異性との交際経験はなさそうだ。
前日に美咲とファーストキスを済ませていた拓馬は、この時点で気分的に優位に立った。
「それじゃ、どちらがキスがうまいか試してみようよ」
「え⁉　ど、どうして私が、拓馬とキスしなきゃならないの⁉」
「俺よりキスがうまければ、愛子の言ったことを全面的に信じるし、これからは君の意見にも口答えしないって誓うよ」
「じょ、冗談じゃないわ！　そんなこと、私は絶対に認めないから！」
「ははーん、そんなにムキになるところを見ると、やっぱりキスの経験もないんだ」
「あ、あるわよ！」
不思議なものだ。
愛子を前にすると、他の女の子には言えないようなことまで平気で言えてしまう。
何にしても、長年の鬱憤を一瞬で晴らしたかのようだった。
そわそわと落ち着きがなくなった彼女の姿を見ているだけで、ようやく一矢を報いたという気持ちが込みあげてくる。
（せっかくかわいくなったんだし、これを機会におとなしくなってくれればいいんだ

けど）
しばし心地のいい勝利感に浸っていた拓馬だったが、愛子が階段からすっくと立ちあがった瞬間、両肩をビクッと竦ませた。
よほど悔しかったのだろう、握りしめられた拳が小刻みに震えている。
（や、やばい……ぶっ飛ばされる！）
身の危険を感じた拓馬が逃げだそうとした刹那、か細い声が耳に届いた。
「……いいわ。キスしようよ」
「え？」
「その代わり、私よりキスがうまくなかったら絶対に許さないからね！」
振り向いた愛子の瞳には、うっすらと悔し涙が滲んでいる。
いったい、どこまで負けん気が強いのか。
単にやり込めるつもりが、思わぬ展開になったものだ。
拓馬にしても、昨夜の受け身一辺倒の経験だけでは自信などあろうはずがない。
（こ、こりゃ、下手なキスをしたら、ぶっ飛ばされるぐらいじゃ済まないかも）
愛子はスポーツバッグとラケットを手にし、階段を下りていく。
「ど、どこ行くの？」

「本堂の裏手。誰かが来たら困るでしょ！」
一度口にした以上、拓馬もここであとに引くわけにはいかなかった。
こうなれば、もう成り行きに任せるしかない。
地面に下り立つと、緊張感から下半身がふわふわと浮ついている。
愛子のあとをこわごわとした足取りで追いながらも、その一方で拓馬の心臓はトクトクと微かな鼓動を打っていた。

4

本堂の裏手は外灯ひとつなく、闇夜一色に染まっていた。
月明かりがなければ、歩くことさえままならなかったろう。
向かいは雑木林が林立し、もののけが飛びでてきそうな気味悪さを漂わせている。
（ぶ、不気味だなぁ。男でも、一人ではとても足を踏み入れられないよ。本当にこんなところでキスするのか？）
不安そうな顔つきをしている拓馬の前で、愛子はスポーツバッグとラケットを地面に置き、本堂の板塀を背に振り返った。

「いいよ」
「え？」
「キスしていいって言ってるの」
少女はそう言いながら双眸を閉じ、形のいい顎をクンと上げる。
どうやら、愛子は本気のようだ。
くるりとカールした長い睫毛、ミカンのひと房のようなプリッとした唇。
月の淡い光が彼女の顔を照らし、類い希なき美少女へと変貌させていた。
（……か、かわいいなぁ）
胸がキュンと締めつけられ、股間の逸物がズキンと疼く。
気の強い性格を知らなければ、この時点で完全に舞いあがっていたかもしれない。
牡の本能は騒ぎはじめているのだが、拓馬は複雑な心境を隠せなかった。
（マジでキスしちゃっていいのか？）
気心の知れた幼馴染みだけに、愛子が強がっているのはよくわかる。
もしかすると彼女にとっては、これがファーストキスになるかもしれないのだ。
しばしためらっていると、少女は目を閉じたまま口を開いた。
「どうしたの？　びびった？」

口元の冷ややかな笑みを見た拓馬は、プクッと広げた鼻の穴から荒い息を吐いた。
（やっぱり、かわいくない！）
高校生ならキスのひとつぐらいしていても不思議ではないし、アメリカ人なら誰もが挨拶で交わしている行為なのである。
意を決した拓馬は、細い肩を両手でしっかりと掴み、自身の唇をゆっくりと近づけていった。
少女の睫毛がピクリと震える。
眉尻がやや下がり、黒髪からフローラルな香りが漂ってくる。
覆い被さるように桜色のリップに唇を押しつけると、愛子の身体は瞬時にして強ばった。
（や、柔らかい。女の子の唇って、ホントに柔らかいや）
昨夜は想定外の美咲のアタックに気が動転してしまったが、今日は多少なりとも心に余裕がある。
二日続けての姉妹とのキス体験に、拓馬は妙な昂奮を覚えた。
まるで自分が、ジゴロになったような錯覚すら抱いてしまう。
（あぁ、信じられない。昨日は美咲姉ちゃんと、今日は愛子とキスをしてるなんて）

ペニスはズボンの下でむっくりと体積を増しはじめていたが、拓馬はこの先どうしたらいいのか困惑していた。
愛子は口をしっかりと閉じ、決して唇を開こうとしない。
このままでは、キスの上手い下手を判断することはできないはずだ。
本来なら強引に口をこじ開け、ディープキスに持ちこむのだろうが、拓馬自身が経験不足だけにそこまでの勇気をもてない。
（思っていたとおり、キスの経験はないみたいだ。とりあえず、ここでやめておいたほうが無難かな）
そっと唇を離すと、愛子はうっすらと瞳を開けた。
「……これで終わり？」
微笑を湛え、平静を装っているように見えるが、口元が引き攣っているのがよくわかる。相変わらず、頑固な女の子だ。
（ようし！　こうなったら、もうどうなっても知らないぞ！）
拓馬も一歩も引かず、再び口を押しつけ、舌先でつつきながらチュッチュッと唇を貪っていく。
「……ンぅっ」

鼻からくぐもった吐息が洩れた直後、愛子の唇が微かに開いた。
ここぞとばかりに舌を潜りこませ、息吹を送りこむ。
美少女の口の中は、まるで熱でもあるかのように火照っていた。
舌が微かに重なり合い、続いてヌメヌメとした粘膜に舌先が触れる。歯茎や柔らかい口腔粘膜をなぞりあげてから、無我夢中で舌を蠢かすと、少女は拓馬の両腕をがっちりと鷲掴んできた。
ヌチャと唾液の跳ねあがる音が響き、しっとりと濡れた愛子の舌を搦め捕る。
弾力感のある生温かい感触に、牡の本能が一気に揺り動かされた。
キス勝負のことなど、一瞬にして頭の中から消し飛び、全身の血液が股間の一点に集中していく。
(あ、あぁ、やばい……も、もう止まらないよ)
拓馬はキスをしながら、身体を愛子に押しつけていった。
ふっくらとしたバストが胸に合わさり、両足のあいだにむちっとした右足の太腿が挟みこまれる。気が弱いと思われた幼馴染みの荒々しい行動に、愛子は少なからずびっくりしているようだ。
舌先を上下左右に泳がせるたびに、身体がビクンと反応する。

制服越しとはいえ、少女の肉体はスポンジケーキのように柔らかかった。
神経が研ぎすまされているのか、ふんわりとした感触がはっきりと伝わり、股間の肉槍が完全勃起を示していく。
もっちりとした太腿が裏茎に接すると、脊髄に甘美な電流が走り抜け、獰猛な情欲をぐんぐんと上昇させていった。
ビンタをされてもいい、張り倒されてもかまわない。
今の拓馬は理性どころか、美咲の顔さえ忘却の彼方に押しやっていた。
「ふ……ンぅ、ぅぅぅぅむっ」
愛子は、かなり息苦しいようだ。
拓馬のキスにまったく応えることなく、舌はピタリと止まったまま。固く目を閉じ、キスから逃れようと顔を左右に振りはじめる。
それだけでは中断できないと判断したのか、拓馬の腕を強い力で押し返した。
ようやく顔が離れ、唾液が二人の唇のあいだで透明な糸を引く。
殴られることを覚悟していたものの、意外にも愛子の瞳はしっとりと潤んでいた。
眉尻が下方に下がり、口も微かに開いたままだ。
美少女の切なげな顔を見た瞬間、拓馬は無意識のうちに本音を口走っていた。

「か……かわいい」
直後に愛子は目を伏せ、頬を桜色にポッと染める。
初めて見せた幼馴染みの恥じらいの表情が、牡の本能をこれでもかと刺激した。
「あ、愛子っ！」
「あ……拓馬、ちょっ……」
再び唇を奪い、胸の膨らみを右手でまさぐりながら、欲情した下腹部を愛子の下腹にぐいぐいと押しつける。
舌を口中に忍ばせても、今度は先ほどのような抗いの素振りは見せない。
愛子自ら熱化した舌を絡みつかせ、同時に全身の力も徐々に抜け落ちていった。
舌の動きはぎこちなかったが、その初々しさがたまらない。
「は……ぅン、ふ……ぅぅぅンっ」
鼻から抜ける甘い溜息が、脳幹を痺れさせる。
人差し指で胸の頂点をなぞると、少女の身体がピクピクと、面白いように反応した。
小ぶりなバストながらも、マシュマロのようなふわりとした感触に気持ちが昂る。
(し、信じられない。愛子と、キスばかりかエッチなことまでしてるなんて)
冬にもかかわらず、美少女の身体は火の玉のように燃えあがり、性感もかなり高ま

っているようだった。
ひょっとすると、初体験は愛子と済ませることになるかもしれない。
そうなってもおかしくないほど、拓馬の欲望は限界ぎりぎりまで膨らんでいた。
乙女のプライベートゾーンを穴が開くほど凝視し、指で愛撫したあと、心ゆくまで舌で舐りあげたい。
できれば剥きだしのペニスを手に握らせ、おしゃぶりもさせてみたい。
しまいにはギンギンに反った怒張を膣内に挿入するシーンまで、あらゆる妄想が脳裏を駆けめぐる。
（おマ〇コって、どんな形をしてるんだ？　あぁ、見たい、触ってみたいよぉ！）
拓馬は鼻息を荒らげると、牡の本能に忠実に従った。
バストの膨らみから下方に右手を移し、短めのプリーツスカートをそろりそろりとたくしあげていく。
愛子はまだ気がつかないのか、強硬な拒絶は見せてこない。
甘い唾液を啜りあげると、呼応するかのように舌をチュッチュッと吸い返してくる。
彼女の中では、まだキス勝負が継続中という意識にとらわれているのかもしれない。
スカートの布地をウエスト付近まで捲りあげた拓馬は、チャンスとばかりにパンテ

ィの上から指先をすべらせた。
「ふっ！　うううぅンっ」
愛子は腰を捩り、再び全身に力を込める。
股の付け根に指先が潜りこむと、拓馬は心の中で歓喜の雄叫びをあげた。
（あ、あったかい！　女の子の下半身て、こんなに温かいんだ⁉　しかも……し、湿ってる！　パンティの上からでも、はっきりとわかるぞ‼）
女の子も、キスだけで性的な昂奮をするようだ。
その事実を知ったとたん、凄まじい欲望が脳裏を覆い尽くす。
股間の中心に指を押しあて、小さく回転させると、少女は釣りあげられた鮮魚のように内股を痙攣させ、鼻から断続的な喘ぎを放った。
心なしか布地の湿り気が広がり、指先に粘っこい分泌液が絡んでくる。
本能の命ずるまま、拓馬は先ほど思い描いた妄想どおりの手順を試みた。
股間から指を離し、そのままコットン生地の上縁から忍びこませる。
次の瞬間、愛子の両手が拓馬の手首をがっちりと掴んだ。
少女は渾身の力を込め、乙女の秘園を守ろうとする。
負けじとばかり、拓馬は必死に指を伸ばした。

全身の血が沸騰しているのか、柔らかい絹糸のような繊毛、ぷっくりと膨れた恥丘が汗ばんでいる。
神秘のとばりまであと数センチ、指腹がヌルッとした感触を捉えた瞬間、口中に熱風のような息が吹きこまれた。
「は……ふぅぅンっ」
拓馬が顔を離すと、愛子の瞳はすでに焦点が合わず、半開きの口から小さな溜息が間断なく洩れている。
少女の表情を見た限りでは、快楽の波に呑みこまれているのは間違いないようだ。
(あぁ……俺は今、愛子のおマ〇コを触ってるんだっ!)
陰唇らしき二枚の肉帯と、上部に位置する小さな尖りを確認した拓馬は、中指を第一関節から折り曲げてみた。
「……ひ、ンっ!」
しっぽりと濡れた蜜壺に指先が差しこまれ、美少女が小さな悲鳴をあげる。
(す、すごいや、濡れてるっ!)
初めて触れた女性器の触感に、拓馬は目を白黒させた。
膣の中は溶鉱炉のように熱く、とろとろに蕩けた柔肉が指先に絡みつくようにひく

ついている。
男は誰もが、花蜜に溢れたこの膣内にペニスを挿入するのである。
どんなに気持ちがいいのか、想像ができるというものだ。そして拓馬を異様に昂奮させたもうひとつの理由は、快感を抗おうとする愛子の顔つきだった。
眉を八の字に下げ、下唇を噛みしめて耐える姿に、いつもの気の強さは微塵も感じられない。そのギャップと恥じらいの仕草が、男心を燃えさせるのだ。
すでに愛子の額は汗でうっすらと濡れ、顔は首筋まで真っ赤に染まっていた。
「う……ぅぅンっ」
何と凄艶な表情をするのだろう。
もっともっと、いやらしい行為で責めたててみたくなる。
拓馬は意識的に、中指を上下にそよがせた。
「は、ひ……ンっ」
手首を掴んでいた少女の手から力が抜け、パンティの下からチャプチャプと淫らな水音が響き渡る。
（す、すごいエッチな音!!）
愛子の秘芯から放たれる猥音が、少年の欲情をぐんぐんと上昇させる。

当然、彼女の耳にも届いているはずだ。
困惑げに眉をたわめ、いやいやをするように腰をくねらせる様子が悩ましい。
淫らな水音をさらに聞きたくて、拓馬は自然と指の動きを速めていった。
指腹に絡みついた花蜜がすべりをよくし、クチュンクチュンと粘り気のある抽送音へと変化していく。同時に、愛子の唇の隙間から甘い溜息が洩れだした。
「は……ふぅ、いや……ぁぁぁぁンっ」
美少女は頬をリンゴのように染め、虚ろな瞳を宙にさまよわせる。
拓馬はズボンの下で、ペニスをギンギンに反り勃たせていた。
ひょっとすると、指だけでエクスタシーに導けるかもしれない。
昂奮の坩堝と化した拓馬が、淫裂の上方に位置する小さな尖りに親指を伸ばすと、愛子は股間を隠すように片足をくの字に曲げる。
「は、ふンっ……だめっ」
次の瞬間、圧迫された膣の奥からどろりとした愛液が溢れでてきた。
「お……おマ〇コから、愛液がこんなにたくさん！」
思ったことをそのまま口走ったものの、そのセリフはあまりにもデリカシーがなさすぎたようだ。

少女はすかさず眉を吊りあげ、キッと睨みつけてくる。
次の瞬間、胸に凄まじい衝撃が走った。
両手で突き飛ばされた拓馬は、不意を突かれ、後方に大きくよろける。
パンティから手が抜けたと同時に、愛子の右手が宙に翻った。
「……あっ！」
パッチーンという甲高い打擲音が鳴り響き、今度は左頬に錐を突き刺したかのような痛みが走った。
「あ、あつぅ！」
頬を手で押さえ、びっくりした表情で愛子の顔を見つめる。
気の強い少女の逆襲は、これだけで終わるはずもなかった。
（や、やばいっ！）
戦慄が全身を貫いた直後、空気を切り裂くようなストレートパンチが飛んでくる。
目の前で白い火花が散り、拓馬はもんどりうって地面にひっくり返っていた。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/